

研究ノート (Study Notes)

親の期待に対する反応様式の発達的变化

——大学生の回想データから——

春日 秀朗¹⁾・宇都宮 博²⁾・サトウタツヤ²⁾

(立命館大学大学院文学研究科¹⁾・立命館大学文学部²⁾)

Developmental Changes in Reaction to Parental Expectations: A Retrospective Study Based on Questionnaire Surveys

KASUGA Hideaki¹⁾, UTSUNOMIYA Hiroshi²⁾ and SATO Tatsuya²⁾

(Graduate School of Letters, Ritsumeikan University¹⁾/College of Letters, Ritsumeikan University²⁾)

The purpose of this study is to examine developmental changes of children's reaction styles to parental expectations. A total of 157 undergraduate students completed a questionnaire that assessed their feelings (n=74) and actions (n=83) to parental expectation when they were in elementary school, junior high school, senior high-school and currently via free description. Correspondence analysis was conducted on the responses to the questionnaire. It was revealed that forms of children's reaction change with the relationship to their parents and their growth. In childhood, children blindly accept parents' expectations and have a tendency to show a positive response. When they were junior and senior high school students, they had negative feelings toward parental expectations about school and felt frustrated that they could not live up to these expectations. It would appear that this feeling of frustration about failing to meet their parents' expectations is important for adolescents to have. Adolescents acquire the ability to act on their own initiative through college life, but some students are afraid of whether they can deliver the hopes of their parents. It is believed that we need to pay attention to those adolescents' experiences of setbacks to in an effort to understand them and provide proper support.

Key Words : parental expectation, forms of reaction, developmental change

キーワード : 親の期待, 反応様式, 発達的变化

問題と目的

親が子どもに抱く期待とその影響

親は様々な願望を、期待という形で子どもに対して抱く。それは「健やかに育てほしい」、「勉強を頑張るってよい学校に入ってほしい」、「良い

友人関係を築いてほしい」などのように子どもの幸せを願ったものや、「おとなしくいうことを聞いてほしい」、「将来自分の面倒を見てほしい」といった親自身の都合や願望によるものが挙げられる。柏木(1990)は、そうした親の期待や願いが子どもを取り巻く環境を作り、その環境が子どもの発達に影響を与えると述べている。

親の期待が子どもに与える影響としては、職業選択や人格面、学業面の目標、進学などのキャリア形成に影響を与えることが示されている(河村, 2003; Majoribanks, 1996; 小川・田中, 1979, 1980; Patrikakou, 1997; 遠山, 2006)。また学業成績への期待において、子どもが親の期待に応えることで、親がより高い期待と関与を持ち、その結果さらに子どもが良い成績を取るというプロセスが明らかにされている(Englund, Luckner, Whaley, & Egeland, 2004)。Oishi & Sullivan (2005) は大学生の「親の期待達成度認知」に注目し、期待に応えることができていくという認知が高いほど自尊感情が高まることを示した。また春日・宇都宮(2011)は親の期待に対して肯定的な感情や行動がそれらに対する肯定感を高め、自尊感情を高めるのに対し、期待に対する否定的な感情や行動はその肯定感を低め、自尊感情を低めることを示した。また春日(2012)では期待に対する負担感や反発するような行動は子どもの自己抑制的な性格傾向を高め、生活満足感を低めることが示された。

以上のように、親の期待を認知すること、また期待に応えることによる肯定的な影響が示されている。勉強や進学について期待を感じていない、言われたことがないと回答した高校生の中には親からの関与を望むものがある(伊藤, 2009) ことから、期待が子どもに与える肯定的な影響とともに、期待を全く感じないことで問題が生じることが示唆されている。

その一方で、子どもの認知する親の期待が、子どもの持つ能力や意欲に対して高く、そのバランスが崩れている過剰期待の問題が指摘されている(松本・渡辺, 1983; 孫, 2010)。過剰期待は主に学力に関する領域について見られ、神経症的完全主義や社会不安、精神疾患を導く可能性が示唆されている(Brain & Resse, 2007)。高校での成績に対する親からの期待を過剰であると感じている青年は、学業不安や抑うつ傾向、

攻撃性が高くなること(Crystal, Chen, Fuligni, Stevenson, Hsu, Kitamura, & Kimura, 1994)が指摘されていることから、必ずしも親の期待が子どもに対し肯定的な影響を与えるとは言えない。

その他の領域においても、孫(2010)は「子どもに完全性を求めること」、「子どもに自分の夢を託すこと」、「学業面」、「自己愛を満たす道具としての子どもへの期待」について過度の期待認知が「親から傷つけられた」という認知に対し正の影響を与えることを明らかにした。また春日(2012)では人間性に関する期待が高いと期待に対する肯定的な反応を示し、進路に関する期待や「良い子であってほしい」という期待認知のみが高い場合は期待に対する否定的な反応が高くなることが示された。このことから過剰期待だけではなく、期待内容や、複数の期待の認知形態から影響を受けることが示唆され、その複雑さが指摘できる。

親の期待が子どもに与える影響の研究においては、期待そのものに良いもの、悪いものである、という評価を与えるのではなく、期待するプロセスや期待の認知に注目していくことによって親子の関係性の中で期待の効果を適切に生かすことができる方法の模索が重要である(渡部・新井, 2008)。同様に子どもが期待に対してどのような感情を抱き、行動をとるのかという反応様式に注目することは、親の期待が子どもに与える影響のメカニズムを明らかにすることに有効であると考えられる。

期待と反応様式の発達的变化

親が子どもに対して抱く期待と子どもに与える影響に関して、中山(1992)は母親が小学生の子どもに対してどのような領域を重視し、子どもにその達成を期待するのかについて調査した。その中で、家庭においても学校生活においても「教科の学力を伸ばす」、「進んで勉強に取

り組む」といった項目が高学年になるほど高くなり、親が重視する領域が子どもの発達に伴い、社会的側面から学習面へ移行することを示している。また遠山 (2006) は小・中学生を対象として調査を行い、「人格面での成長期待」、「規範に関する期待」、「将来の進路に関する期待」の3領域への期待を抽出したうえで、規範や将来の進路に関する期待の認知が小学生の方が中学生よりも高いことを示した。

親が抱く期待や子どもの期待認知とともに、期待の反応様式の変化に注目することも重要である。河村 (2002) は親の価値観を無批判に取り入れていた児童期を過ぎ、青年は親の考えと自分の考えを照合しつつ、自分なりの生き方を模索する必要があると述べている。親の期待や価値観に対し、青年の価値観や進路が異なる場合に意見の対立や葛藤を引き起こす事がある。そのような葛藤に対し、子どもは親の期待を無視したり拒否したりといった「期待を拒絶する能力の育成」や、自分と親の考えや価値観に折り合いをつけることの重要性が指摘されている (長峰, 2003; 内田, 1997)。

児童期から青年期にかけて、学校段階の移行という環境的な変化とともに、心理的離乳を経て親子関係の再構成が行われるように、心理的、関係性的に大きな変化を迎える。落合・佐藤 (1996) は中学生の時点では親が子どもを抱え込もうとし、また子どもは親から守られている関係であるが、次第に「自分は親から承認され、頼りにされている」と思う状態へと変化していくと述べている。

しかし、青年期後期である大学生においても、期待により苦しみを感ずる者も少なくない。春日・宇都宮 (2011) は、大学入学以前に感じた期待とそれに対する感情や行動が肯定的であれば、現在の自尊感情が高まるのに対し、否定的であれば低まることを示した。また孫 (2010) は親の過剰期待により大学生の「親から傷つけ

られた」という認知が高まることを示している。これらから、大学生においても期待による影響に注目する必要がある。

本研究では以上のような、子ども自身や取り巻く環境の変化に伴い、子どもが期待に対して示す反応様式がどのように変化するのか明らかにすることを目的とする。その変化については先行研究による知見からある程度予測することが可能であるが、実証的に示すことには意義があると考えられる。また、回想法により大学生が期待に対し、過去にどのような感情や行動を示してきたのかを調査することで、大学生の現在に至るまでの背景にある要因を検討する。回想法の限界として、現在の状態が過去の記憶や評価に影響を与え、変化させてしまうことが考えられる。しかしそれらを踏まえた上で、大学生が過去をどのように捉えているのかを検討することは、期待が大学生に与える影響の要因や問題点を明らかにし、解決法を模索する一助となると考える。

方法

対象者

関西の大学に通う学生に対し調査を行った。不備のなかった157名(男性40名,女性117名)、平均年齢19.3歳(SD=1.2)を対象とした。有効回答率は63.7%だった。

調査内容

大学生に対し、小学校・中学校・高校・大学(現在)のそれぞれの学校段階において、親からの期待に対しどのような感情を抱き、行動をとったのか、回想法によって自由記述での回答(複数回答可)を求めた。

他にもいくつか尋ねたが、本研究では用いなかったため割愛する。

手続き

調査は2012年5月に行った。大学の授業時間中に質問紙を配布し、授業の評価とは関係がなく、回答は強制ではないこと、途中で回答を中止しても構わないことなどを教示として与えた。

回答者の負担を考慮し、感情について尋ねる質問紙と行動について尋ねる質問紙の2種類を作成し、1人の対象者に対して片方のみを配布し、回答してもらった。その結果、行動についての質問紙では83名(男性23名,女性60名)、感情についての質問紙では74名(男性17名,女性57名)からの回答を得た。

また、本文中で具体例として回答を用いるとき、倫理的配慮から個人が特定されないよう、内容の意味するところが変わらない程度に変更を加えた。

データの分析方法

自由記述のデータの分析にあたって、本研究ではKJ法(川喜田,1986)を用いてカテゴリの作成を行った。心理学を専攻する大学院生2名と筆者を含む3名で協議しながら、以下の1~4の手続きを行った。

1. ラベル作り

まず自由記述による回答を一行見出しにし、1枚のカードにする作業を行った。同一の回答者による複数の回答では、弁別可能だと判断されたものは別々のカードとして扱った。

2. グループ編成

次に、質的に類似していると思われるカード同士をまとめていく作業を行った。少しずつ小さなグループを作っていく、これ以上大きくはならない最小単位のグループをつくった。どのグループにもまとめられないカードがあった場合には、無理にどこかのグループに入れてしまわず、そのままにした。

3. 表札作り

グループが出来上がったら、それぞれのグルー

プに見出しをつける作業を行った。同じグループとしてまとめられたカードを再度確認し、共通点を探し、簡潔な一言で表して、そのグループの見出しとした。

4.2 と 3 を繰り返す

2と3の作業を、数グループになるまで繰り返した。

本来のKJ法ではこの後に図解化をする必要があるが、本研究ではカテゴリ作成が目的であったため、図解化は行わなかった。

結果

感情のカテゴリ 回答の具体例は『』を用いて記述する。感情について得られた回答から、9つのカテゴリが形成された(表1)。

「嫌」は「期待されることがただただ嫌だった」など、親から寄せられる期待に対して嫌悪するような感情であると判断した。

「期待達成への不安」は『期待に対して自分が応えられる気がしなかった』など、親からの期待を達成すること、自分がこれまで達成することができていたのかどうか、といったことへの不安感であると判断した。

「負担・プレッシャー」は『受験勉強の時にしつこく言われてプレッシャーに感じた』などからなり、親の期待を重荷だと感じていたと判断した。

「放っておいてほしい」は『希望を言ってくる親に対して放っておいてほしいと思った』など、期待そのものではなく親に対する感情からなされた。

「しんどい・苦しい」は『期待されることが苦痛だった』など、「負担・プレッシャー」よりも期待に対して強い否定的な感情であると判断した。

「嬉しい」は『期待してもらって嬉しかった』など、親からの期待や期待する親自身に対して

表1 感情のカテゴリーと具体例，度数

カテゴリー	具体例	学校段階			
		小	中	高	大
嫌	ただただ嫌だった	2	3	15	17
期待達成への不安	期待に応えられるのが不安だった	1	1	3	7
負担・プレッシャー	プレッシャーに感じた、重荷だった	2	3	8	9
放っておいてほしい	うるさい、放っておいてほしいと思った	3	4	5	5
しんどい・苦しい	しんどいことがあった、苦痛だった	1	3	15	5
嬉しい	嬉しかった、期待されるのは気分が良い	22	8	2	10
反抗心	納得できなかった	1	10	10	5
頑張ろう	頑張ろうと思った、糧になった	15	14	6	2
何も思わなかった	期待を当然だと思った、何とも思わなかった	25	15	8	11

肯定的な感情を抱いた記述から成された。

「反抗心」は『親と自分の考えが食い違い、納得できなかった』などの回答から成り、親と向き合っている、向き合おうとしていると考えられ「放っておいてほしい」とは区別された。

「頑張ろう」は『期待されて嬉しくて、もっと頑張ろうと思った』など、期待されることを肯定的に捉え、自身が努力する糧にしていた記述から成された。

「何も思わなかった」は『期待されることが当然だと思った』など、期待されることを当たり前と思ったり、疑問を抱いていない記述から成された。

行動のカテゴリー 行動について得られた回答から、7つのカテゴリーが形成された（表2）。

「応えられなかった」は『期待に応えようと頑

張ったが、応えられなかった』など、期待に対する無視や反発の結果ではなく、応えようとしたが本人の能力を越えていたため応えることが出来なかった、と判断した記述から成された。

「勉強した」は特に中学生、高校生時において『勉強を頑張った』という記述が多かったことから、総合的な期待に応えようとする「応えた」とは区別した。

「応えた」は『出来るだけ期待に沿った行動をした』など、親の期待に対して積極的に応えようとする行動とした。

「自分的行動」は『自分の意志で決めた。親の期待は関係ない』など、期待とは無関係に自分の意志で行動した記述から成された。

「従った」は『このころは親の言うとおりに従ってばかりいた』など、積極的に応えようとする

表2 行動のカテゴリーと代表例，度数

カテゴリー	具体例	学校段階			
		小	中	高	大
応えられなかった	期待に沿おうとしたができなかった	0	1	8	3
勉強した	良い高校に進めるよう、塾で頑張った	4	17	22	7
応えた	出来るだけ期待に沿った行動をした	33	13	15	13
自己決定的行動	自分の意思を優先した	4	4	9	22
従った	親の言うことに従った	10	10	3	0
反抗した	親と衝突した、無視した	5	22	7	4
意識せず行動した	特に意識して行動しなかった	3	2	3	4

行動とは区別され、『親の言うことは絶対だったから』など親の権威によるものであると判断した。

「反抗した」は『無理な期待をする親が嫌で衝突した』など、期待そのものと共に期待する親に対して反抗的な行動をとったものから成された。

「意識せず行動した」は『特に期待を意識して行動してこなかった』など、期待を感じる程度が低く、「自己決定的行動」とは区別されるものであると判断した。

コレスポネンス分析

各学校段階における特徴を明らかにするとともに、その変化、感情と行動の関係性を可視化するため、各カテゴリーに含まれる記述の出現度数を求め、コレスポネンス分析を行った(図1)。

その結果、小学校と近い距離には「嬉しい」や「応えた」など、期待に対する肯定的な感情や行動がプロットされた。また「何も思わなかった」も近いように、期待を意識することが少ない、

意識する程度が低い反応が見られた。

小学校と中学校のほぼ等距離の位置には、「従った」と「頑張ろう」という反応がプロットされた。また中学校においては近距离に「反抗した」という行動が現れ、「反抗心」という感情は高校とのほぼ等距離に現れた。同様に「勉強した」という行動も中高のほぼ等距離にみられた。

高校生においては「しんどい・苦しい」が近距离にプロットされ、また大学とほぼ等距離の位置に「放っておいてほしい」や「負担・プレッシャー」といった期待に対する否定的な感情が多く現れ、また「応えられなかった」という行動も近距离に現れた。

大学においては上記の他、「自己決定的行動」や「期待達成への不安」、「意識せず行動した」が近距离にプロットされたことが特徴として挙げられる。

次元の解釈

図1から、次元1の正の方向には「頑張ろう」

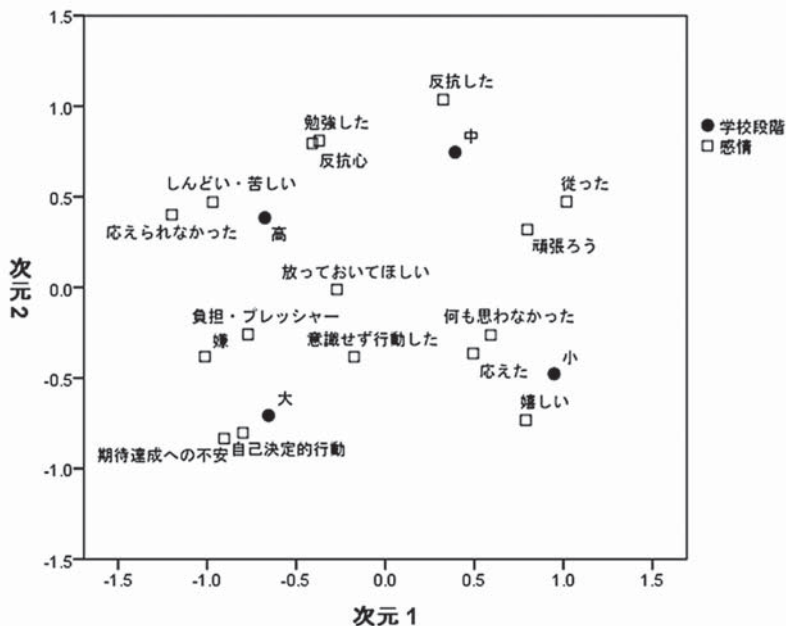


図1 期待に対する反応様式と学校段階のコレスポネンス分析の結果

や「嬉しい」など期待に対する肯定的な感情や、「従った」や「何も思わなかった」など期待を容容、もしくは特に意識していなかったことがうかがえた。負の方向には「しんどい・苦しい」や「嫌」といった否定的な感情が見られたことから、次元1は正の値では期待に対して無批判的であり、負の値では批判的であることを表すと判断した。

縦軸に関して、図の上部には「反抗した」と共に「勉強した」や「行動した」が現れたのに対し、下部には「自己決定的行動」、またやや中心点よりではあるが「意識せず行動した」などが見られ、行動選択の基準に期待がどの程度関与しているのか、を表すと判断した。図1から、小学校～大学のそれぞれの学校段階における期待に対する反応様式は、直線的ではなく、半円状に発達することが示された。

考察

各学校段階における特徴と変化

小学生から中学生 小学校段階においては期待されることに対して「嬉しい」という感情や、期待に対して「応えた」という行動が近くにプロットされた。期待に対し疑問を持たず、親の価値観を無批判に受け入れている(河村, 2002)とともに、親からの関心が得られているという実感が得られるために、期待されることを肯定的に捉えたと考えられる。小学校と中学校との中間地点に「従った」がプロットされたことからこの傾向は中学生時においても見られる一方で、「頑張ろう」という感情も見られた。このことから、小・中学生時には、励みや達成目標として期待を意識していることがうかがえる。

中学校から高校 その一方で、親に対して乱暴な口を聞いたり、言うことを聞かず口答えしたり、派手な服装や髪形を好む第一次心理的離乳、いわゆる「第二反抗期」(西平・吉川, 2000)

に該当するため、中学生時には、反抗的な行動や反抗心が見られた。

その一方で中・高校生時には「勉強した」という行動が見られた。高校受験、大学受験という大きなイベントを控えた時期であり、また学業への期待は多くの研究によって注目されてきた領域である。子どもは基本的に親からの期待に応えようとする傾向があり、親が態度に期待を表さなくとも、必死に期待を読み取り、自分を抑えてでも期待に沿った行動を自らに強いる傾向がある(斎藤, 1996)。このような時期に強く印象に残る期待として学業が挙げられるのは自然なことと考えられる。

「反抗した」と「勉強した」がほぼ同位置にプロットされた要因として、高校・大学入学は子ども自身のその後の人生に大きく影響を与えるものであり、また多くの子どもにとって進学先の選択は、最初の大きな主体的な決定を行う機会であると考えられる。「勉強した」という行動は、期待とは独立した、子ども自身の希望をかなえるためのものを含む。期待に対する主体的な行動の選択には、今までとは異なる世界観や価値観、人々との出会いにより、自分の生き方を模索することが重要であると指摘されている(白井, 2003)。高校・大学進学によりそれらを得る機会は増えると考えられるが、入学以前の段階で、如何にして新しい価値観や出会いを獲得するかが課題となると考えられる。

それとともに、新しい価値観や出会いを得る機会が少ない、難しいと考えられる段階においては、親の期待は子どもにとっても重要な目標や指針となりうる。親の期待から強く影響を受けて進路選択を行った時、その後どのような差異が現れるのかについて注目することも重要である。

感情面においては、中・高校時に感じる感情について、高校時には「しんどい・苦しい」や「放っておいてほしい」、「負担・プレッシャー」といっ

たネガティブな感情が見られた。学業期待はそれが過剰であることで、または学業期待そのものが子どもに負担感を抱かせることが示唆されており (Brain & Resse, 2007; Crystal, et. al, 1994 前出; 春日, 2012), この時期の負担感をどのように扱うのかは今後も重要なテーマである。

また高校時において、期待に「応えられなかった」という行動が見られた。『親の希望と自分の希望が合わず、つらく感じた』といった回答が少なからずみられたことも踏まえると、期待認知の大きさからくる過剰期待、親とのずれ、自分を抑制して親の期待に応えることとともに、どのような形でも親の期待を裏切ることによる葛藤を感じる事が期待への負担感を高めている要因として考えられる。

高校から大学 高校から大学にかけても期待に対する否定的な感情が見られるとともに、小学生時には期待されることに「何も思わずに」応えていたのに対し、「意識せず行動した」や「自己決定的行動」など、期待されていることを認知しながらも、期待に左右されない行動が見られる。落合・佐藤 (1996) は心理的離乳の観点から、親子関係の大きな転換期は高校生から大学生の間に起こっていると指摘している。

また大学入学により、それまでの大きな期待に対し結果を出したことに注目したい。先に述べたように親の期待に応えることは子どもに肯定的な影響を与えるが、大学生においては自己決定的な行動とともに、期待を意識しない行動が見られた。『大学に受かったのだから、もう期待通りに行動しなくてもよいだろうと思った』というように、大学入学というイベントは、親の期待に対する子どもの一つの回答として機能するのではないかと考えられる。

その一方で、大学時にはまた、これまでの期待に応えることができているのか、また今後期待に応えることが出来るのかといった「期待達成不安」が見られた。大学受験時から継続した

過剰期待や親子間のずれと葛藤、今日の不況による就職不安などを表していると考えられ、大学生という時期はこれまでの結果に向き合うとともに、今後親の期待に対しどのような態度をとるのか、といったことを考える時期であると考えられる。

そのため、大学生が現在においてどのような要因により負担感を感じているのか明らかにするためにも、長期的な継続調査を含む、高校やそれ以前の成育歴を踏まえた研究が必要である。

期待に対する反応様式

コレスポネンス分析の結果から、期待に対する反応様式の発達は、「期待を意識した行動」という軸から見ると、期待をそれと意識せず親の意思に沿うように行動していた小学生時から、中・高校生時には期待へ向けられる意識が強くなり、大学生時には再び期待を意識した反応が少なくなるといった変化が見られた (図1)。無批判に親の言うことに従っていた段階から、反発・批判を高めながらも期待を意識した行動をとる段階へと移行し、自己決定的で主体的な行動を選択するという逆U字の変化がみられる。しかしその一方で、高校・大学政治において「放っておいてほしい」、「意識せず行動した」といった円の内側に近づく変化もうかがえる。

期待に対する主体的な行動の選択は、青年の自立や、親を一人の人間として受け入れながらも批判的な目を向けることができるようになる発達から説明されてきた。しかし本研究で見られた、「期待達成への不安」という感情、「応えられなかった」という行動にも注目すべきではないか。

先述のように、これまでは期待に対して応えようとする、肯定的な行動が子どもに対して肯定的な影響を与えることが示されてきた。またその反対に負担感や嫌、期待に対する反抗や回避などが扱われることが多く、その両者に対す

るアンビバレントな反応様式に関しては、期待の反応様式の複雑性も相まって検討されることは少ない。

『期待に応えようとしたのにできなかった』、『応えたいのに結果が出せなかったらと思うと不安』といった行動や感情は、挫折や挫折不安という言葉に換言できると考えられる。神原(2009)は青年を無気力に繋げる挫折経験に注目し、特に挫折と失敗について、「頻度」、「回復」、「成長」、「転機」という捉え方の4側面を共通するとし、挫折は失敗よりも転機として捉えられやすい一方で、挫折の方が回復は難しく、また対象への主観的価値が高いことを指摘している。またそれ故に挫折経験は失敗経験よりも青年に与える衝撃が大きいという。その結果、期待に対して主体的に取り組むことから回避する方向へと変化するのはないか。

子どもが親の期待に対し負担を感じる要因の一つとして、子どもが自身の能力に対して感じる「過剰期待」や、どの領域への期待をどのように感じているかという認知形態（春日, 2012; 孫, 2010）などが指摘されている。しかし「応えたいのに応えられない」という期待における挫折経験に注目し、挫折へと至る要因、挫折から回復する要因も今後検討する必要がある。特に高校・大学は精神的にも経済的にも自立するための準備段階であり、如何にして挫折から立ち直るか、親や親の期待から脱却できるのか、そのプロセスに注目する必要がある。

総合考察

本研究により、子どもが発達に伴い、期待に対して抱く感情や行動の変化が実証的に示された。中・高時には期待というものを強く意識するとともに反感や批判を高めるようになる。そのように期待に対し主体的に、時には無視・反発する能力が重要であると指摘される（内田,

1997）一方で、現実として期待に応えようとする姿勢や努力がみられ、だからこそ「期待に応えることが出来たのか、出来るのか」といった挫折や期待達成不安を感じていることが明らかになった。

期待に対する反応様式の多様性や複雑性が指摘されており（河村, 2002; 池田, 2009）、十分にそのすべてが検討されていると言うことは難しい。子どもが期待に対して実際にどのように感情を抱き行動するのか、それらを青年期後期に振り返った時、どのように評価し、現在の状態に影響するのかを詳細に検討することは、子どもの理解、また期待に苦しむ青年が抱える問題点の焦点化に寄与するものであると考えられる。

本研究の課題として、回想法によって得られた結果であるため、実際の児童期や青年期前期に生じる反応様式とは差異が生じることが考えられる。今後は対象者を拡大し、本研究の結果を追従する研究も必要であろう。あくまで子どもという立場からの視点に限られており、親の子どもへの対応や総合的な親子関係、それらの変化が捉えられていないことが挙げられる。また子どもから親への意識に重点が置かれ、きょうだいや友人、教師など親以外の重要な他者、社会環境からの影響に関して検討されていない。親子関係は青年期後期においても重要な影響を与えうるが、親子関係のみではなく、子どもを取り巻く環境から広く検討することも重要である。

謝辞

当研究の実施において、授業中にお時間をいただいた先生方、回答をいただいた学生の皆様に多大な協力を得ました。

この場をお借りしてお礼を申し上げます。

引用文献

- Brain, M.W. & Resse, C. (2007) Parental influences on social anxiety: The sources of perfectionism. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 55, 282-285.
- Crystal, D. S., Chen, C., Fuligni, A. J., Stevenson, H. W., Hsu, C. C., Ko, H. J., Kitamura, S., & Kimura, S. (1994) Psychological maladjustment and academic achievement: A cross-cultural study of Japanese, Chinese, and American high school students. *Child Development*, 65, 738-753.
- Englund, M. M., Luckner, A.E., Whaley, G.J., & Egeland, B. (2004) Children's achievement in early elementary school: Longitudinal effects of parental involvement, expectations, and quality of assistance. *Journal of Educational Psychology*, 96, 723-730.
- 池田幸恭 (2009) 大学生における親の期待に対する反応様式とアイデンティティの感覚との関係. 青年心理学研究, 21, 1-16.
- 伊藤忠弘 (2009) 大学生の親子関係の認知と親からの期待・プレッシャー経験: 他者試行的動機づけの要因を規定する予備的分析. 青山心理学研究, 9, 11-22.
- 神原知愛 (2009) 大学生の挫折経験に関する心理学的考察—挫折感と自己成長感との関連—. 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要, 67, 59-66.
- 柏木恵子 (1990) 環境としての親の期待. 発達, 41, 9-17.
- 春日秀朗 (2012) 親からの期待が大学生に与える影響—期待に対する反応様式および自己抑制型行動特性・生活満足感に注目して—. 日本家族心理学会大会発表論文集, 29, 66-67.
- 春日秀朗・宇都宮博 (2011) 親からの期待が大学生の自尊感情に与える影響—子どもの反応様式に注目して—. 立命館人間科学研究, 22, 45-55.
- 川喜田二郎 (1986) 「KJ法—混沌を語らしめる—」. 中央公論社.
- 河村照美 (2003) 親からの期待と青年の完全主義傾向との関連. 九州大学心理学研究, 4, 101-110.
- Majoribanks, K. (1997) Family contexts, immediate settings, and adolescents' aspirations. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 18, 119-132.
- 長峰真治 (2003) 親との葛藤から見たフリーター—複数事例による検討 (フリーター—その心理社会的意味)— (フリーターの光と影). 現代のエスプリ, 427, 105-115.
- 中山勘次郎 (1992) 子供に対する母親の期待とその発達の傾向. 上智教育大学研究紀要, 11, 1-12.
- 西平直喜・吉川成司 (編) (2000) 「自分探しの青年心理学」. 北大路書房.
- 松本恒之・渡辺恵美子 (1983) 親からの期待に関する縦断的研究. 東洋大学児童相談研究, 2, 35-51.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996) 親子関係の変化から見た心理的離乳への過程の分析. 教育心理学研究, 44 (1), 11-22.
- 小川一夫・田中宏二 (1979) 父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響に関する研究. 教育心理学研究, 27 (4), 272-281.
- 小川一夫・田中宏二 (1980) 親の職業が娘の職業選択に及ぼす影響に関する研究. 教育心理学, 28 (4), 328-331.
- Oishi, S. & Sullivan, H. W. (2005) The mediating role of parental expectation in culture and well-being. *Journal of Personality*, 73, 1267-1294.
- Patrikakou, E. N. (1996) Investigating the academic achievement of adolescent with learning disabilities: A structural modeling approach. *Journal of Educational Psychology*, 88, 435-450.
- 齋藤学 (1996) 「アダルト・チルドレンと家族—心の中の子どもを癒す—」. 学陽書房.
- 白井利明 (2003) 「大人へのなりかた—青年心理学の視点から」. 新日本出版社.
- 孫逸舒 (2010) 両親の過度の期待と青年の抑うつ傾向の関連—日本と中国における比較研究—. 人間文化創成科学論叢, 13, 237-245.
- 遠山孝司 (2006) 小・中学生の親子関係, 親からの期待, 子どもの目標の関係. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 53, 37-55.
- 内田弘弘 (1997) 「自分」と家族. 北山修 (編) 「『自分』と『自分がない』」. 星和書店.
- 渡部雪子・新井邦二郎 (2008) 親の期待研究の動向と展望. 筑波大学心理学研究, 36, 75-83.

(2013. 1. 21 受稿) (2013. 6. 21 受理)